

凜と愛欲の日々　　↓初めての生エッチ編↓

今俺には付き合っている彼女がいる。

彼女の名前は上月　凜（こうづき　りん）。高校一年生の後輩で、気の強そうなツリ目が可愛らしい女の子だ。

「……はあ」

今は学校の昼休み。各々が学食や購買に向かっていているのを横目に見ながら、俺は一人自分の席で頬杖をついて溜息をついていた。

その理由は自分でもよくわかっている。先日の凜とのデートのことだ。

俺は意を決して凜を自分の部屋に誘った。凜も決してそれを嫌がっていたわけではなく、多分だが望んでいただろう。

しかし、結果は散々だった。

あまりの凜の身体の気持ちよさに暴走した俺は、欲望のままに凜を貪ってしまった。

結果として彼女には痛みと恐怖を与えることしかできなかったし、こっちも罪悪感でそれ以上続けることができなかった。

その日はそれから映画を見て過ごしたが、内容なんか覚えていない。俺の記憶にあるの

は、ひたすらに気まずい時間が流れたことだけだった。

そんな最悪の休日を通り過ぎてしまえば、気分が落ち込むのも仕方がないだろう。しかもただでさえ俺はやりたい盛りの高校生。一回は射精できたとは言え、まだまだ全然足りていない。

本当ならもっと何回も凜の身体を味わうことができたはずなのに……。

一応その後メッセージアプリのやり取りで、またデートしようという約束はしたのだが、どうにも直接会って何かを言わないと俺自身の中にもやもやしたもの溜まっていつてしまふ。だからと言って急に後輩の教室に押し掛けるにもいかず、しかも今週はテスト期間だ。週末にデートに誘うこともできそうにない。

とは言っても、ここでこうして頂垂れていてもどうにもならない。昼飯は食わなければ午後の授業に体力が持たないからだ。今はテスト前なので、特に頑張る必要がある時期だ。

「落ち込んでるねー」

そんな風な声が、頭の上から聞こえてくる。

いつの間にか俺の近くには、クラスメイトであり凜からすれば同じ水泳部の先輩にあたる、日高 杏奈（ひだか あんな）が立っていた。

灰色っぽい黒髪にミディアムボブの、ちょっと垂れた目が愛嬌のある美少女だ。

顔もいいのだが、特筆するのはその身体だ。実際俺の前前には彼女の胸にぶら下がっている二つのたわわな果実がぶるんと蠱惑的に揺れている。

「杏奈……」

「ご飯、一緒に食べようよ」

「友達はいいいのか？」

杏奈は優しく、面倒見がいい。凜も懐いているらしく、基本的に彼女は常に友達と一緒にいるというイメージがあった。

「断ってきちゃった。ね、いいでしょ？」

媚びるような声でそう言われては、断る理由もない。

俺達は二人で連れ立って、人気のない場所へと向かっていく。

杏奈に連れられて行った先は、旧校舎と言われる今はもう殆ど使われていないエリアの一角だった。

俺達の通っている学校の敷地はかなり広く、噂によると教師ですらその全貌を把握して

いないとか。その多くが旧校舎エリアと呼ばれる場所で、いずれ取り壊す予定があるものの、様々な理由で延期になっているらしい。嘘か本当かは知らないが、俺達が卒業するまではこのままだと聞いたことがある。

俺達がやってきたのは旧校舎の中庭で、一応雑草の手入れなどはされているものの、花の類は当然なく。中心に一本の木が生え、後は全面が芝生に覆われているような場所だった。「ここでもいいよね」

恐らくは俺達以外にもここを利用する生徒がいるのだろう。妙に綺麗なベンチに杏奈が腰かけて、隣をぼんぼんと叩いて俺を呼ぶ。

彼女はスポーツバッグから取り出したお弁当を食べ始め、俺もそれに倣って朝コンビニで買っておいた総菜パンと菓子パンを食べる。

「凜ちゃんと上手く行かなかったんだ？」

「……ああ、まあな」

隠していても仕方がない。杏奈と言うのは、不思議とそんな気分にさせる女の子でもあった。

「最初は仕方ないよね。わたしも初体験の時は痛かったもん。しかもさ、わたしが痛くて泣いてるのにその時の彼氏ったら何度もやろうとしてくるから、怒って帰っちゃった」

「……それって、何歳の時だ？」

「んーっと……確か、中一だね。でもすぐに気持ちよくなつたから、凜ちゃんもそうなると思ふよ」

「だといいけどな」

なかなかどうして、一度失つた男の自信と言うのは回復できないものだ。

「大丈夫大丈夫。わたしが保証するよ」

「そう言ってもらえると少しは気が楽になるよ」

「ふふーん。でも勿論それだけじゃないよ。また君のために、協力してあげる」

「協力って……この前と言ひ、それで杏奈が何か得するのか？」

「可愛い後輩と友達が幸せになる手伝いがしたいんだってば」

今一つ納得はできないが、とは言え彼女がそれで何か悪さをするとお思えない。

ここは素直に協力してもらつた方がいいだろう。

「じゃあ、また頼むか。でも何をすればいいんだ？」

いつの間にか俺達は食事を食べ終え、杏奈は自分のお弁当箱を鞆にしまっていた。

そして隣に座る俺の膝の上に、手を乗せた。

「お、おい……」

「君が凜ちゃんと上手く行かなかったのは、初体験で焦っちゃったからだよね？」  
耳元に唇を寄せて、杏奈が囁く。

それに抵抗できる男がいるのなら、俺は教えてほしかった。

「そ、そうかもな」

「じゃあさ、エッチなことに慣れれば……きっと二人で気持ちよくなれるよ」

杏奈のその言葉だけで、俺のちんこがちがちに勃起し始めていた。

ズボンの下から存在をアピールするそれを見て、杏奈はクスリと小さく笑う。

「ふふっ、君のおちんちんはもうやる気満々だね」

正直な話、この展開を全く期待していなかったわけではない。

以前も杏奈に迫られたことがあるし、あの時は時間がなかったが昼休みはまだ半分以上残っている。そしてこの時間に誰もいないということとは、これから中庭に人がやってくる可能性は限りなく低い。

「ねえ、練習しちゃうか？」

「で、でも駄目だろ……俺は凜がいるし、杏奈だって」

「わたしは今、彼氏いないよ。セフレならいるけどね」

やっぱり噂は本当だったらしい。しかし、今この状況ではその宣言すらも俺を興奮させ

る作用しかない。

「それに、これは練習だから浮気じゃないよ」

すりすり、杏奈の手が俺の膝を摩る。

指先がほんの少し、ズボンの下の俺のペニスに触れるだけで、期待感からびくびくと動いてしまっていた。

「あはっ、凄おい……♡ このおちんちん入れたら、きつと気持ちいいだろうなあ」

「……か、かもな」

などと意味不明な返答をしてしまう。

「た、確かに練習は必要だよな？」

「そうだよー。練習は必要」

指先がちんこに絡みつく。

それだけで射精しそうなほどに気持ちよかった。

「じゃあ、練習……しよっか？」

杏奈は一度立ち上がると、俺の正面に立つ。

そこから手を伸ばし、俺の首の後ろにまで回してから膝の上に正面から乗っかってきた。そのまま抱き着くような姿勢で、お互いの股間が触れ合う。

「あんっ♡ おちんちん……元気だね」

全身で感じる杏奈の体温、真正面にある綺麗な顔。そして何より身体に思いつきり触れるむっちりした太ももと大きなおっぱいが、俺の思考を奪っていた。

「よくわたしのおっぱい見てたよね？」

「う、それは……」

「サイズ、教えてあげようか？」

ぎゅっと杏奈が強く抱きしめると、彼女の両胸が俺の顔を覆いつくす。

「88の、Eカップだよ」

その数字だけで俺の情欲は最高潮に達していた。

大きいとは思っていたが、まるでグラビアアイドルだ。その巨乳を好き勝手出来る機会なんて、今後訪れないかも知れない。

「あんっ、ふふっ……おっぱい大好きなんだ」

甘やかすような声が頭上から響く。

俺は気付けば、制服の上から杏奈の胸に顔を埋めていた。

「んっ、あっ、はぁ……。いいよ、ほら、おっぱいに顔埋めててね……あんっ」

すりすり俺の膝の上で杏奈が動き出す。

太ももが擦れて、彼女のスカートの下にある下着に包まれた柔らかな部分がズボン越しに俺のちんこに接触する。

「あはっ、やっぱりおっつきいね……後でちゃんと見せてもらおうからね」

そう言いながら、ぐりぐりと身体を押し付けてくる。

俺は無言で杏奈の胸を堪能しながら、申し訳程度に身体を揺らして杏奈に刺激を与えていた。

「あんっ♡ いいよ……君のおちんちんがわたしのパンツと擦れて、とってもいい感じ……あっ、今おまんこにちよっと触ったのわかる？」

胸の中で首を縦に振る。

ペニスの先端が何度も擦れあったことで、杏奈の息も次第に荒くなってくる。

同時に彼女のパンツの内側からは、とろりとした蜜が溢れ出してきた。

「あ、はあ……んんっ♡ いいっ……やっぱりおっつきいおちんちんだと違うね……んんっ♡」

ぴくんと身体を強張らせながら、杏奈は優しく俺の身体に全身を擦り付ける。

あまり強くし過ぎると俺が射精してしまうのがわかってるのだろうか、快感こそ与えながらもギリギリで射精するのを焦らすような、そんな動きだった。

しばらくの間二人でそうやって身体を押し付けあってきたが、やがて杏奈の方が我慢できなくなったようだった。

杏奈は一度俺から降りると、セーラー服の上半身を捲り上げる。ブラジャーに包まれた彼女の大きな胸が、まるでプリンのように弾んだ。

「ふー……。そろそろ次行こっか」

「あ、杏奈……!」

俺は辛抱できなくなり、彼女の大きなおっぱいに手を伸ばした。

「やあんっ……こら、ん、やんっ♡」

ブラジャー越しに揉みしだくと、彼女の大きな胸がまるでマシユマロのように形を変えていく。

口では少し嫌がっているようだが、杏奈の表情は笑っていて心から拒否しているわけではないようだった。

「あ、はあんっ……やんっ♡ 駄目だつてば……! ほら、ブラジャー外すから待ってて」

両手を後ろに回して、杏奈がブラを外す。

片手に納まらないぐらいの大きさの乳房と、ピンク色の綺麗な乳首を目の前にして、俺の理性はすぐに決壊した。

「やっ、あああん♡ はんっ、ん、ふう……ひいん♡」

両手でそのおっぱいをこねくり回すと、すぐに杏奈は感じ始める。

表情は蕩け、頬は赤く染まり、まるで発情しているかのようなフェロモンを出して俺を誘惑していた。

「やんっ、あっ、あっあっ♡ ああああんっ、ふああっ、おっぱい気持ちいいよ♡」

俺が指を動かし、胸を揉むたびに声を上げるのが愉快で、ひたすらに彼女の胸を撫でまわし揉みしだく。

「次は乳首だ」

ピンと指で乳首を弾いてやると、杏奈は一際高い声を上げて喘いだ。

「あああんっ、乳首弱いからあ、優しくしてえ♡」

「駄目だ。彼女がいる男を誘惑するような淫乱は、こうしてやるっ！」

ぐりぐりと乳首を摘まみ、少し乱暴に捻る。

それだけで杏奈の身体は何度も震え、その度に彼女の唇からは甘い声が漏れ出していた。

「ん、ふああ……このままだとイっちゃうから、ね？」

杏奈が俺の手を優しく掴んで制する。

このまま彼女をイかせてもよかったのだが、よく考えれば今は昼休みだ。俺も股間をこ

の状態でそのまま授業に戻るのは避けたいところだった。

「……あっ」

スカートのホックを外し、すっと地面に落としたところで杏奈が声を上げた。

「ゴメン、わたし今日ゴム持っていないんだけど……」

股間部が濃くなった青色のショーツを丸出しにしながら、杏奈がそう言った。

「あ、そう言えば俺も」

これから関係が進めがそう言うことを期待してしまいが、昨日の今日で凜と学校でエッチをするとは考えていなかった俺も、当然持ってきているわけではない。

「生でとかは……」

「駄目に決まってるでしょ。赤ちゃんできたら大変じゃない」

頼めばさせてくれるかとも期待したが、当然無理だった。だからと言って、このままお預け状態で授業に戻るのには厳しいものがある。

「あ、そうだ……どうせなら」

何かを思いついた杏奈が、俺の膝の前にしゃがみ込む。

「はい、お尻上げてー」

ズボンのホックを外してファスナーを開けて、俺が言われるままに腰を持ち上げるとそ

のままズボンとパンツを一気にずり下げた。

「わっ、やっぱり大きいねー。膣内に入れたらとっても気持ちよさそう」

杏奈のその言葉に、俺の一物がピクリと動く。

「あはっ、返事した。可愛いー。っていうか、包茎なんだ」

「……う」

杏奈の言う通り、俺のちんこは亀頭部分まで皮に包まれている。先日凜とエッチしたときはコンドームを付ける際に自分で剥いたのだが、今は杏奈に見られないように皮を剥いている暇はなかった。

「やっぱり変か？」

「ううん、そんなことないよ。わたしが今までエッチしてきた人も、半分ぐらいは包茎だったし。ちゃんと洗ってるよね？」

「ああ、そりゃな」

凜と付き合い始めてからは特にだ。

「だったら気にしないよ。むしろ可愛くて好きかも。ね、足開いて？」

言われるままに両足を開く。

杏奈は俺の足の間に身体を入れると、膝立ちになって両胸でペニスを挟み込んだ。

「うおっ……!!」

すべすべてふわふわ、もっちりした感触に俺のちんこが包まれる。俗に言う、パイズリだ。

「ふふーん。これは凜ちゃんにはできないもんね」

ギューッと、両側からおっぱいが俺のペニスを圧迫する。圧迫と言っても当然、全く痛かったり苦しかったりすることはない。杏奈の温かい体温と合わさって、まるで粘液の中に包まれているような快感がペニスを包んでいた。

「んっ♡ ん♡ ん♡ どう?」

「すげえ気持ちいい……」

俺は一生懸命に胸を上下させる杏奈を見ながらそう答える。

正直、まだ皮が剥けていない状況でよかった。敏感な亀頭に直接パイズリをされたら、下手をすればそれだけで情けなく射精させられてしまっていたかも知れない。

「ふう、あはっ♡ 凄いな。君のおちんちん、大きすぎて先っぽがおっぱいから飛び出してる。こんなの初めて♡」

ずり、ずり、ずりと優しく杏奈が俺のペニスを胸で抜きあげる。

それだけではなく、時には両側から抱きしめるように圧迫したりして、飽きないように

様々な刺激を与えてくれていた。

「ん、はあ……先っぽからお汁、沢山出てきてるね♡ んっ♡ わたしのおまんこも今、とろとろになってるよ」

俺のちんこから出てきた先走り汁を塗り、滑りをよくしてから更にぬるぬると抜きあげる。

彼女のふわふわおっぱいから与えられる極上の快感で、俺は何度も無意識のうちに腰を動かしていた。

「だーめ。ほら、君は動かないの。ほら、ぐり♡ ぐり♡ すりすり♡」  
「う、おとおお」

あまりの快感に、口からは無意識に声が漏れていた。

「ふー……。気持ちいい？」

優しく息を吹きかけながら、そう尋ねてくる。

「あ、ああ……最高だ……。でも、いいのか？」

「何が？」

「杏奈はその、気持ちよくなれないだろ？」

「くすっ、優しいね。でも大丈夫だよ、そもそも今日は君の練習だし」

そう言えばそうだ、そんなことはすっかり頭から抜け落ちていた。

もっともそんなものはただの建前で、今やっている行為が凜とエッチをする時に何かの役に立つとは到底思えないが。

「ん、ん、あんっ♡ おちんちん暴れてるね……。わたしのおっぱい、そんなにいいんだ？  
いいよ、わたしのふわふわおっぱいで、好きなだけ気持ちよくなってね♡ 沢山自信つけて、凜ちゃんと気持ちいいエッチしようねー♡」

甘やかすように言いながら、杏奈はパイズリを続ける。

「それにね、ん、ん……。♡ は、んっ……。あああんっ♡ 実はこうやって、んんっ、男の子のおちんちんを気持ちよくしてあげるの、んんんっ、好きなんだっ……。あんっ♡」

どうやら杏奈自身も、ペニスを自分の性感帯の一つである胸に擦り付けることで快感を得ているようだった。

「君がもし思いっきり気持ちよく射精してくれたら、わたしもイっちゃうかも……。あはあんっ♡ また大きくなったあ……。♡」

杏奈の言葉に、俺のペニスが更に膨らんでいく。自分でもどれほど大きくなるのか限界がわからず、軽い恐怖を覚えるぐらいだ。

「元氣いいね……。でも、そろそろ時間だから」

確かに言われてみれば、ここに来てからも結構な時間が経っている。そろそろチャイムが近いのは間違いない。

「はい。剥き剥きしようね」

器用におっぱいで挟んだまま、俺のペニスを包皮をずり下げていく。

「やんっ、失敗しちゃった……♡ もう一回……」

再び両手で外側から胸を俺のペニスに押し付け、ゆっくりと戻らないように皮を下げていく。

「おっ……」

むず痒い小さな痛みのような感覚が走るが、それもすぐに彼女のふかふかして温かなおっぱいに包まれて快感だけが残っていく。

「成功ー！ これ、前の彼氏にしてあげたら本当に喜んでくれたんだよね」

杏奈のその言葉に、俺の胸が小さく跳ねた。勿論俺には凜がいるし、それを咎めるつもりなんてない。

同時に、更に興奮が増してくる自分がいることにも気付く。

こんなにスタイルがよくて可愛い女の子を、自分の好き放題に貪った男がいるというのだ。

杏奈が次第に染められ、淫乱になっていく過程を想像するだけで、俺のペニスはびくびくと震えいきり立っていく。

「すっごーい……♡ これ、今までで一番かも」

「あ、杏奈……早く」

辛抱できなくなった俺は、情けなくも杏奈に快感をねだる。

彼女は全くそれに対して軽蔑することもなく、小さく笑うとパイズリを再開してくれた。ずり、ずり、ずりゆ、ぬりゆ。

たぶん、たぶん、むにゆうっ。

さっきまでとは比べ物にならないペースで、杏奈の胸が俺のペニスを刺激する。それは戯れるような動きではなく、本気で俺の精を絞りに来る動きだった。

すぐに射精感が込み上げてくるが、俺は歯を食いしばってそれを耐える。時間がないのは承知しているのだが、やはりこの快感をすぐに手放すのは惜しかった。

「あ、我慢してるー。だったらこっちも……!」

動きが加速していく。

俺のちんこから出た先走りを潤滑油として、杏奈のパイズリはラストスパートを迎えようとしていた。

敏感になった亀頭が柔らかい胸に押しつぶされるたびに、とてつもない快楽がそこから俺の頭の中に昇ってくる。

もう俺は既に、射精することしか考えられなくなってきた。

「ほら、ほらあ……わたしのパイズリでイっちゃえ……♡ 恥ずかしくないからねっ、すぐく気持ちいから、仕方ないんだからっ♡」

杏奈の声に合わせて、俺のペニスがビクンビクンと大きく震える。

彼女はそれが嬉しいようで、荒い息を吐きながら動きを速めていく。

「ねー、おちんちんも射精して言って言ってるよ？ 血管バキバキに浮かせて、こんなに全身びくびくさせて、もうザーメン上ってきてるよね？ すぐそこまできて、発射してくたまらないよねっ？」

ぎゅーっと、抱きしめるような愛撫。

それからすぐにまた激しい上下運動。

ズリズリズリズリ。

タポタポタポタポ。

杏奈の言う通り既に俺の精子は完全に装填済みであり、気を抜いたらいつでも発射してしまえるような状態だった。



名残惜しさを表すように、俺の肉棒は未だに勃起したままだったが、流石にこのまま2回戦に行くわけにはいかない。携帯を取り出して時間を見れば、昼休みの終わりまで後5分ぐらいしか残っていなかった。

「ちょっと待ってね」

杏奈がウェットティッシュを取り出して、俺のちんこを綺麗に拭いてくれる。

それから自分の顔や胸など一通り綺麗にして、それを丸めて俺の菓子パンが入っていたビニール袋に入れて入り口を結んだ。

「俺が捨てとくよ」

「そう？　ありがと。本当はエッチした後もゆっくりしてたかったんだけどね。でもこれで、凛ちゃんとのエッチも大丈夫でしょ？」

「あ、ああ……」

俺は立ち上がりながら、そう返事をする。

実際、これを経験したことでそんなに劇的に変化が起こるとは思えないし、杏奈との関係もこれで終わりかと思うと寂しいものがある。

勿論凛のことは彼女として大切にしたいが、杏奈とのエッチも最高に気持ちよかったというのが俺の本音だ。

「ふふ」

そんな俺の考えを見透かしたのか、杏奈は蠱惑的に微笑んだ。そして数歩歩いて俺の耳元に唇を寄せると、小声で囁く。

「次は、凜ちゃんとのエッチが成功してからだよ」